成蹊大学一般研究報告　第四十七巻　第七分冊
平成二十五年十一月

副詞句と否定文

井島正博

はじめに

前稿（井島（二〇一三・三））では、相対数量詞・絶対数量詞と否定との関わりについて検討を加えた。本稿ではそれをさらに一般化して、副詞句全般と否定との関わりについて考察したい。

1　従来の研究

原田（一九八二・三）では、否定との関係の仕方によって、以下のように副詞を四類に分ける。

副詞は、まず、その係り先が肯定・否定のいずれかに定まっている場合（Ⅰ・Ⅱ型）と定まっていない場合（Ⅲ・Ⅳ型）の二つに分けられる。Ⅰ型とは、係り先が肯定形に定まっている副詞であり、Ⅱ型とは、否定形に定まっている副詞である。Ⅲ型とは、係り先の肯定か否定かが決定以前に、副詞が述語と結合し、その後、この述語全体の肯定か否定かが定まるような副詞である。Ⅳ型とは、係り先の肯定か否定かが決定後に、その全体と副詞が結びつくような副詞である。Ⅰ型～Ⅳ型を図示すると次のようになる。

① Ⅰ型……副詞―（肯定形の述部）

② Ⅱ型……副詞―（否定形の述部）

③ Ⅲ型……（副詞―述語素材概念）（肯定要素／否定要素）

④ Ⅳ型……副詞―（肯定形／否定形　の述部）

これらをさらに、副詞の意味、あるいはハの下接の可否、さらには述格に立つかどうかの可否（すなわち「…するのはXだ」のXにくることができるかどうか）などの条件によって細分化し、それらに該当する語を示したものが以下の表である（図表一）。

型		意味による分類	五種の程度副詞	語	「は」の下接の可（○）否（×）	述格に立つかどうかの可（○）否（×）
Ⅰ	A	情態副詞		ようやく、だんだん、たちまち、おいおい、じょじょに、しだいに、いよいよ、ます、そろそろ	×	×
	B	程度副詞	① 程度副詞	たいへん、とても、ひじょうに、かなり、そうとう、おおいに、たいそう、ひときわ、ずい分、すこぶる		
Ⅱ		陳述副詞 程度副詞	② 程度副詞	めったに、必らずしも、たいして、さして、あまり、みじんも、いささかも、決して、こんりんざい、ゆめゆめ、全然、かいもく、からきし、一向に、さっぱり、とうてい、もうとう、つゆ、さらさら、ちっとも、少しも、絶対、まさか、よもや	×	×
Ⅲ	A	情態副詞		しっかり、はっきり、ゆっくり、きっちり、きっぱり、びっしょり、こっそり、しんみり、ゆっくり、ぐっすり、あっさり、のっそり	○	○
	B			ぽつんと、つるりと、そっと、さっと、ぐんと、すらりと、どっと、ぱっと、けろりと、ぴたりと	○	(○)
	C			きらきら、がやがや、だらだら、うかうか、ころころ、ざあざあ、がたごと、どんどん、そよそよ、しとしと	(×)	(×)

図表一

Ⅳ					
A（十全性副詞）	程度・量・頻度の副詞	③程度副詞	全部、みんな、いつも、つねに、しじゅう、一日中、毎度、完全に、全く、あらいざらい	肯―× 否―○	○
B（非十全性副詞）		④程度副詞	大部分、いくらか、いささか、多少、ほとんど、しげしげと、頻々と、しばしば、たびたび、時々、おりふし、よく、ときたま	○	○
C（時点性副詞）	時の副詞		明日、今、昔、あるとき、かつて、はじめ、いましがた、ただいま、きょう、その時、その頃	○	○
D（相対性副詞）	程度副詞	⑤程度副詞	もっとも、はるかに、さらに、ずっと、一番、もっと	×	×
E（注釈性副詞）	注釈副詞 陳述副詞		きっと、果して、やはり、現に、もし、決まって、断じて、まるで、多分、結局、つまり、実際、おそらく、もちろん、無論、さいわい、当然	×（一部○）	×（一部○）

以上のような形で副詞を類型化しようという試みは、明示的に言及されているわけではないが、副詞を階層的に位置付けようとするものであると了解できる。すなわち、Ⅲ型副詞が述語素材概念と対応し、その後肯否が定まるという意味で最も内側に位置し、Ⅰ・Ⅱ型副詞がそれぞれ肯定形の述部・否定形の述部と対応するという意味でその外側に位置し、Ⅳ型副詞が肯否の定まった述部に対応するという意味で最も外側に位置すると了解できる（図表二）。

図表二

これを南（一九七四・三）の四階層説にあてはめれば、否定辞はB段階に位置付けられるのであるから、Ⅲ型副詞はA段階、Ⅰ・Ⅱ型副詞はB段階、Ⅳ型副詞はC段階に位置付けられるということになりそうである（図表三）。

図表三

ちなみに、北原（一九八一・一）では、情態副詞は使役・受身など動作に関わる段階までは修飾しうるが、打消までは修飾することができないと論じられていた。

これらは、大局的に見る分には、それなりの説得力のある議論であるとは思われるが、子細に検討してみると、必ずしもすべての副詞がこの類型の中にきちんとおさまるわけではないことがわかってくる。第一に情態副詞の中には、少ないとはいうものの否定と呼応するものも存在する。確かにこのような副詞は決して多くはないが、一語の副詞ではなく、複合した副詞句であれば、生産的に作り出すことができる。

(1) a　じっと動かない。

b　石像のように動かない。
c　息を殺して声も立てない。

第二に、ハが下接するかどうかに関しては、その理由は一通りではないように思われる。主題のハに近いものから、対比のハであっても要素否定に関わるもの、関わらないものなどの違いが見られる。

以下では、副詞と述語との対応をもっと詳細に跡づけていくことによって、さらに厳密な副詞と否定との対応関係を明らかにしていきたい。

2　要素否定と事態否定

最初に、副詞類の否定文中での意味と機能を考察するにあたり、どうしても否定の二つの類型を議論に導入しなければならない。最も人口に膾炙した概念は「全部否定」と「部分否定」であるが、これらはここに見られる全部／部分という対立概念から知られるように、数量表現に限られた類型である。数量表現は、確かにこれらの相違が顕著に見られるものではあるが、もっと一般化した概念が求められる。それに対して、「動詞句否定」と「文否定」という対概念は、確かにもっと一般的な概念であると言える。ただ、動詞句／文という対立概念から知られるように、この否定の類型は統語的に規定されたものであり、否定の機能が統語レベルに位置するものであるかのような含意を持つことになる。しかるに、たとえば(2)aは動詞句否定（＝全部否定）であり、(2)cは文否定（＝部分否定）であることは、統語的にも意味的にも問題ないが、(2)bは意味的に部分否定であることは了解できるが、この文が文否定であると言われると、首をかしげざるをえない。それなら、動詞句否定かと聞かれると、なおさら躊躇せざるをえない。要するに、この概念はここで議論したい問題には適当ではないと考えるべきだろう。

(2)a　すべての矢が的に当たらなかった。
b　すべての矢は的に当たらなかった。
c　すべての矢が的に当たったわけではない。

それならば、否定の他の類型、「命題否定」と「モダリティ否定」があてはまるかというと、これは階層的モダリティ論の立場に立って、否定が働く次元が命題レベルであるか、モダリティレベルであるかという問題設定なのであるから、ますます当面の問題から離れてしまう。

ここでは、数量表現としては、(2)aが全部否定となり、(2)b・cが部分否定となるといった意味レベルに位置する相違を、数量表現だけでなくさらに副詞一般に拡張した概念がほしいのであるが、どうやら従来の議論にはそのような対概念は見出すことができないようであるので、ここで前者にあたるものを「事態否定」、後者にあたるものを「要素否定」と呼ぶことにしたい。すなわち、事態否定とは当該の事態そのものが成立しないと打ち消されるものであり、要素否定とは当該の事態は成立するものの、それに関与する要素が打ち消されるものである。

本稿では、この対概念を用いて、否定文中に副詞類が用いられる場合、どのような型がありうるのか、体系的に検討していきたい。

3　情態副詞と否定

まず、情態副詞と否定との関係について検討していきたい。とりあえず、副詞の区分として、情態副詞・程度副詞・陳述副詞という、山田（一九〇八・九）以来の三分類を踏襲しておくが、その後の研究の進展に伴い、相互の境界は必ずしも山田（一九〇八・九）と一致するものではない。とはいうもののとりあえず、情態副詞の外延は、程度副詞でも陳述副詞でもないものといった茫漠としたもののままにしておくことにする。

さてここで、青木（一九八八・八）の議論を導入したい。すなわち、情態副詞句であっても、その係り受けが否定辞までは及ばないa型と、否定辞まで及ぶb型とに分かれると考える。すなわち、a型は、副詞句は否定を伴わない述語の表わす動作の情態を表わすものであり、その否定は他の情態での述語が表わす動作の成立を述べる、すなわち要素否定の表現となる（3a）。また、副詞句にハを添えると、a型という解釈に誘導されることになる（3'a）。それに対してb型は、そもそも述語の表わす動作の不成立に対して用いられるものであり、その動作の不成立の情態を表わすものである、すなわち、事態否定の表現となる。（3b）。

(3)a　お姉ちゃんのように泣かない。

a'　お姉ちゃんのようには泣かない。

［お姉ちゃんがしょっちゅう泣くのと同じようによく泣いたりしない］

b　お姉ちゃんのように泣かない。

［殆ど泣かないのがお姉ちゃんに似ている］

係り受けという観点で否定を論じることの限界は承知しておく必要はあるとしても、このような区別は有効であるように思われる。このように、a型・b型両方の解釈が可能である副詞句、あるいはそれを用いた文としては以下のようなものがある。

(4)a　私情で叱らない。

b　窓をわざと閉めなかった。

すでにここに、情態副詞がb型で用いられる場合の存在が指摘されているのであり、この段階で、情態副詞は否定までは係ることができないという先入観は否定されたことになる。ちなみに、このような副詞句は、a型が用いられることから、当然肯定文にも用いられることは明らかである。

(5)a　妹はお姉ちゃんのように（しょっちゅう）泣く。

b　あの先生は生徒を私情で叱る。

c　太郎は窓をわざと閉めた。

実際、「わざと」を用いた(6)a～cは事態否定、(6)dは要素否定を表わしている。

(6)a　その時の私は腹の中で先生を憎らしく思った。肩を並べて歩き出してからも、自分の聞きたい事をわざと聞かずにいた。しかし先生の方では、それに気が付いていたのか、いないのか、まるで私の態度に拘泥る様子を見せなかった。　夏目漱石『こころ』145

b　男はいつも私と着て寝る寝巻を着ていた。今朝二寸程背中がほころびていたけれど私はわざとなおしてはやらなかったのだ。一人よがりの男なんてまっぴらだと思う。　林芙美子『放浪記』102

c　「じゃあまたね。もうすぐ船がくるでしょうから。」いとまをつげたが、べつに見送りにもこなかった。ゆるされなかったのであろう。わざとふりむきもせず、さっさとあるきだすと、ぞろぞろついてきた生徒たちは思い思いのことをいった。

壺井栄『二十四の瞳』259

d　「秋ちゃん、おめえ、ほんとうに中学に行くのか。」と、急に秋太郎のほうに、からだをねじってしまった。わざと避けたわけではないのかもしれないが、吾一にはその態度が不愉快だった。

山本有三『路傍の石』40

要するに、ここに示した副詞句と述語との関係は以下のようになり、このような述語との関係を結ぶ副詞句を第一類と呼ぶことにする。

・第一類　肯定述語との対応

否定述語との対応　要素否定（ハは任意）

事態否定

このように第一類にはいろいろな場合が存在する、特に事態否定を表わす否定述語との対応がありうる背景としては、第一類副詞が、述語の表わす動作の直接的な情態を表わすものではないことが挙げられるだろう。たとえば、「お姉ちゃんのように」は具体的な情態は「しょっちゅう」なのか「まれに（しか）」（あるいはその他）なのか明白ではないが、それが肯定表現「泣く」とも否定表現「泣かない」とも結びつきうるわけである。「私情で」もそれを原因として、「叱る」ことも「叱らない」こともありうるわけであるし、「わざと」もそのように意図的に、「窓を閉める」ことも「窓を閉めない」こともありうるわけである。

しかるに、一般的に情態副詞と言われて念頭に置かれるのは、動作と直接的な関係にあるものであろう。ということはすなわち、情態副詞は何らかの動作の〝情態〟を表わすものである以上、当該の動作をしない〝情態〟を表わすものではありえない。もしここに否定が用いられるとすれば、当該の動作をしない、すなわち事態否定を表わすものではなく、当該の動作が行われることは前提として、その情態のあり方を打ち消すもの、すなわち要素否定になる。このような表現は実際には以下のようなものである。

(7) a　はっきり言わない。
　b　上手に書けない。
　c　くわしく説明しない。

また、否定が要素否定に限られることから、ハの有無は表わされる意味には大きくは関与しない。

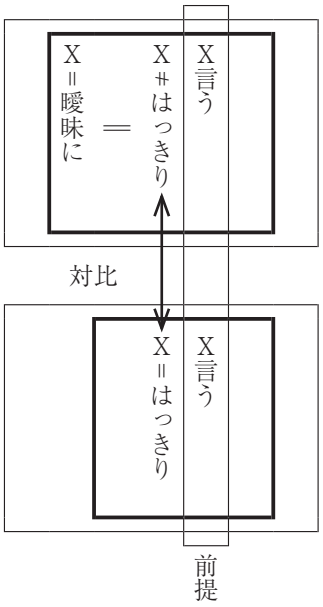
(8) a　はっきり（と）は言わない。
　b　上手には書けない。
　c　くわしくは説明しない。

これらの情態副詞は、動作の〝情態〟を表わすものであるから、むしろ以下のような肯定文のあり方が本来で、否定文の背景にもこれらの肯定文が期待として潜在していると考えられる。

(9) a　はっきり言う。
　b　上手に書ける。
　c　くわしく説明する。

すなわち、これらのような期待を持っていたにも拘わらず、それが実現されなかったことを表わすのが(7)a～dのような否定文であると考えらる。

言い換えると、これは要素独立対比の表現ということになる（図表四）。



図表四

以下は、要素否定で用いられたハの例である。

(10) a　では丁度夜長を幸い、わたしがはるばる鬼界が島へ、俊寛様を御尋ね申した、その時の事を御話しましょう。しかしわたしは琵琶法師のように、上手にはとても話されません。唯わたしの話の取り柄は、この有王が目のあたりに見た、飾りのない真実と云う事だけです。ではどうか少時の間、御退屈でも御聞き下さい。

芥川龍之介「俊寛」326

　b　雪枝は鮎太の躰をのけて、起き上がると、前を合わせ、髪を直し、「大切な躰よ、よして！」と言った。鮎太は夢中でやった自分の動作でまた真赧になった。雪枝が大切な躰と言ったのは、鮎太は詳しくは知らなかったが、雪枝に最近結婚の話が持ち上がっていたので、そのことを言ったものらしかった。

井上靖『あすなろ物語』123

c　東京へ転勤して行ってからの左山が、特派員になって南方へ行ったという噂は耳にしたが、鮎太は彼がどこへ行ったか詳しいことは知らなかった。ただ、彼が他の特派員とは違った取材の仕方で、あっというような仕事をするのではないかと思った。

井上靖『あすなろ物語』295

d「何万年かかる進化もあるし、三時間しかかからない進化もあるんだよ。電話で簡単に説明できるようなことじゃない。でも信じてほしいんだけど、これはとてもだいじなことなんだ。人間の新しい進化にかかわることなんだ」

村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』273

e「僕は生物学者じゃないからよくわからない」と私は言った。「それに性欲の量は人によってずいぶん違うからそんなに簡単に断言はできないと思うね」

村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』189

このように、（肯定的な）述語の意味と深く関わる情態を表わす副詞類を第二類と呼ぶことにしたい。ただし、第二類には何らかのスケールを背後に見出すことができ、ここまで見てきたものはそのうち、「高程度」のものである。

・第二類（高程度）　肯定述語との対応
　　否定述語との対応　要素否定（ハは任意）

ちなみに、かつて『月刊言語』紙上で、本多勝一氏が「日本語の作文技術」という連載をした。その中で、交通標語「車は急に止まれない」について、この標語は「車というものは急停車できない」という意味にはならず、「車が（ブレーキの故障などで）急に止まれなくなった」という意味にしかならない、という普通の日本語話者の直感と随分かけ離れた解釈をした（本多（一九七六・一））。それに対して、『月刊言語』紙上を中心に、甲論乙駁の論争になり、結果として否定についての考察がある程度深まることとなった。

ここでは、本稿の立場から、まずなぜそもそも本多氏はそのような発言をしたのか、またなぜ「車は急に止まれない」に関してはそのような解釈が不適当であるのか、に関して簡単にコメントしておきたい。

恐らく本多氏は漢文の素養をお持ちで、そこからそのような発言がなされたと思われる。すなわち、⑾の例において、漢文では、数量詞（ここでは「再」）と否定辞（ここでは「不」）はいずれも副詞であり、前後を入れ替えることができる。そして、数量詞が前に来る⑾aは全部否定（「一度目も来なかったし、二度目も来なかった」）を表わし、否定辞が前に来る⑾bは部分否定（「一度目は来たが、二度目は来なかった」）を表わす。ちなみに、このことはスコープ理論できれいに説明できる。すなわち、⑾aは数量詞のスコープ内に否定辞があるために全部否定となり（「再［不来］」すなわち、「二度目も［来なかった］」）、⑾bは否定辞のスコープ内に数量詞があるために部分否定となる（「不［再来］」すなわち、「［再び来る］ことがなかった」）、と説明できる。

(11) a　再不来。（再び来たらず）　全部否定

b　不再来。（再びは来たらず）　部分否定

さて、それに対する日本語は、数量詞は副詞（ないし連体詞）として、否定辞は助動詞として実現されるので、副詞は動詞の前、助動詞は動詞の後というように、位置が固定されてしまい、語順による全部否定・部分否定の使い分けはできない。そこで、漢文訓読の習慣として、部分否定の場合には数量詞の後にハを入れることになっている。ちなみに、この日本語の振舞いはスコープ理論ではまったく説明できない。

このような発想を、「車は急に止まれない」に適用すると、日常的な「急停車できない」の意味は（拡張した）部分否定の解釈であるから、(12)bのようにハを入れなければならず、ハを伴わない(12)aは「急に止まれなくなった」といった、一般的な直感とはかけ離れた解釈をしなければならないことになるわけである。

(12) a　車は急に止まれない。　全部否定

b　車は急には止まれない。　部分否定

しかしこのような発想は、すべての副詞が否定との関わりにおいてまったく同じ振舞いをするという前提に立っている。しかるに数量詞（厳密には、相対数量詞ないし基数数量詞）は、第9節に見るように、動作そのものの情態と密接に結び付いたものではないので、第一類に属し、「急に」のような副詞は、動作の情態と密接に結び付いているので、第二類に属していると考えられる。この第二類は、ハがあってもなくても要素否定（部分否定）を表わす。要するに、「車は急に（は）止まれない」はハがあってもなくても「急停車できない」の意味となる。

ここで、この第二類を構成する情態副詞には、ある特徴が見出される。まず、これらの情態副詞にはしばしば対になるものが見出され、それらと比較すると、これらの情態副詞は高程度を表わし、対になる情態副詞は低程度を表わしていることが見て取れる。

高程度		低程度
はっきり	↔	曖昧に・ぼんやりと
上手に	↔	下手に
くわしく	↔	大雑把に・簡単に

すなわちこれまで見てきた第二類の情態副詞とは、その背後にスケールの存在を推測させ、そのスケール上で高程度を表わすものであることになる。そうすると、他方ではスケール上で低程度を表わす一群の情態副詞があることになる。次にこちらの情態副詞に注目すると、これらが肯定文で、ある動作に関する何らかのスケール上で低程度を表わすことは言うまでもない。

(13) a　曖昧に（は）言う。

b　下手に（は）書く。

c　大雑把に（は）説明する。

しかるに、これらを否定文で用いて、低程度であることを打ち消して、高程度であることを表わす表現にはなりがたい（ただし、(14)bの「下手に（は）」を「不用意に（は）」の意味で用いることは可能である）。

(14) a ＊曖昧に（は）言わない。

b ＊下手に（は）書けない。

c ＊大雑把に（は）説明しない。

むしろ、低程度であることを打ち消すことは、まったくその動作が存在しないことを表わすことはあるが、その場合にはモが下接する。

⑮a 曖昧にも言わない。

b 下手にも書けない。

c 大雑把にも説明しない。

このことは以下のように説明できるかもしれない。低程度の情態副詞が否定される場合には、可能性としては高程度である場合と、その動作そのものが存在しない（とりあえず「ゼロ程度」と呼んでおく）場合とがありうる。

高程度		低程度		ゼロ程度
はっきり	↔	曖昧に	↔	まったく…ない
上手に	↔	下手に	↔	まったく…ない
くわしく	↔	大雑把に	↔	まったく…ない

しかし一般的には、低程度の期待を打ち消して、実際には高程度であることを述べるということはあまり見られる状況ではない。それに対して、低程度、すなわち少しはあると思っていたのに（期待）、ゼロ程度、すなわちまったくなかった（現実）という状況はしばしば見られるのではないだろうか。ここで、モが用いられるのは、そもそもその動作が存在しないのであるから、低程度にも存在しない、というように、期待と現実とが否定的に並列関係にあることによるのであろう。このことは井島（一九九五・一〇）で論じた「一＋数詞…ナイ」の形の表現の仕方と同じである（⑯f「ちっとも」、⑯g・h「びくとも」などはすでに全体で副詞となっていると思われるが、本来は「ちっと（少量）＋も」、「びくと＋も」であったと考えられる）。

⑯a その年が暮れに迫った頃お前達の母上は仮初の風邪からぐんぐん悪い方へ向いて行った。そしてお前たちの中の一人も突然原因の解らない高熱に侵された。その病気の事を私は母上に知らせるのに忍びなかった。病児は病児で私を暫くも手放そうとはしなかった。

有島武郎「小さき者へ」20

b 塔は四角形の石造りで、それぞれ東西南北の方位を示し、上の方に行くほど細くなっている。先端には四面の文字盤がついており、その八本の針はそれぞれに十時三十五分のあたりを指したまま、びくりとも動かない。

村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』123

c 「そこにいて頂戴」病人はいつもに似ず、気弱そうに、私にそう言った。私達はそうしたままま、びくりともしないでその夜を明かした。

堀辰雄「風立ちぬ」220

d そんな私のもの言いたげな目つきに気がついたのか、病人はベッドの上から、にっこりともしないで、真面目に私の方を見かえしていた。この頃いつのまにか、そんな具合に、前よりかずっと長い間、もっともっとお互を締めつけ合うように目と目を見合わせているのが、私達の習慣になっていた。

e　私は殆どまんじりともしないで一と夜を明かし、明くる日の午後六時頃まで待ちましたけれど、それでも何の沙汰もないので、もうたまりかねて家を飛び出し、急いで浅草へ駈け付けました。
堀辰雄「風立ちぬ」278

f「君、ひとつ今日は、僕の言う通りにしてほしいんだ。いいか」と彼は言った。「何のこと……？」「とにかく君にまかせて置いたのでは、事がちっとも運ばないからね。今日は僕の言う通りにしてくれ」
谷崎潤一郎『痴人の愛』477

g　信仰ここに定まった。もうびくともしない。染香はまだ眠っている。しかし、これはもはや売女ではない。この赤い斑点のある肉体は今や聖霊の宮である。
石川達三『青春の蹉跌』364

h　貞子の側には母親はすでになかった。あるじの座にあぐらをかいた、はげあたまのまるまるとふとったのが、これは機嫌よく酔っていて、こぶしのにぶき当身ぐらいにはびくともせず、「はっはっは。」と大きく笑いとばしながら「男手ひとつでそだてた娘です。わがままいっぱい、どこに出しても三国一の嫁御寮でしょう。」
石川淳「かよい小町」349

石川淳「処女懐胎」379

ここで、低程度を表わす第二類の情態副詞は以下のように示すことができる。

・第二類（低程度）　肯定述語との対応

否定述語との対応　事態否定（モが必須）

以上では、背後に何らかのスケールを推測させる情態副詞に関して検討してきたが、他方では背後にスケールを推測しがたい情態副詞も存在する。これらも、動作の情態を表わすものであり、肯定文で用いられるのは言うまでもない。ここには多くのオノマトペをもとにした副詞が含まれる。

(17) a　はたと手を打つ。
　　b　ガラリと戸を開ける。
　　c　星がきらきらと輝く。

しかるにこれらは、ハがあってもなくても否定文を作ることはできない。要するにこれらは、スケール上に位置付けることができないために、当該の情態が否定されても、どのような情態であるかを含意することができないのである。

(18) a ＊はたと（は）手を打たない。
　　b ＊ガラリと（は）戸を開けない。
　　c ＊星がきらきらと（は）輝かない。

これらを情態副詞の第三類と呼ぶことにしたい。

・第三類　肯定述語との対応のみ

ただここに、第二類（高程度）と第三類の中間的な情態副詞も存在

する。ハがないと否定文は不自然になるが、ハがあると許容されるようなものである。たとえば、(19)a～cのハのない否定文は抵抗があるように思われる。

(19)a ＊胸がきりきり痛まない。
b ＊雨がざあざあ降らない。
c ＊お菓子をぱくぱく食べない。

しかしながら、（ト）ハを伴った(20)a～cは自然、少なくとも許容度が上がるように思われる。

(20)a 胸がきりきり（と）は痛まない。
b 雨がざあざあ（と）は降らない。
c お菓子をぱくぱく（と）は食べない。

これらは、そのままでは背後にスケールを推測させるものではないが、あえて対比のハを添えることによって、強引にスケールを生じさせているのであると了解できる。それに対して、第二類（高程度）はハの対比の力に拠らずとも背後にスケールを感じさせるものであり、第三類はハの対比の力をもってしても背後にスケールを想定しにくいものであると言うことができる。

さらにここに、完全を期すためには、もう一類を設ける必要があるように思われる。数は少ないにしても、動作そのものの情態を表わす情態副詞が数多くあるように、否定的な状態を表わす情態副詞も見出すことができる。

(21)a あのパーフォーマーは石像のように動かない。
b 彼は驚きのあまりさっきからじっと身動きもしない。
c あたりはひっそりと物音もしない。

これらはハを伴うことはできない。このことは、動作そのものが打ち消されることは、動作そのものがないのであるから、そこにスケールを読み込むことはできない、そのために対比のハを用いることができないと説明できる。

(22)a ＊あのパーフォーマーは石像のようには動かない。
b ＊彼は驚きのあまりさっきからじっとは身動きもしない。
c ＊あたりはひっそりとは物音もしない。

さらに言うまでもないことながら、これらは肯定形述語の情態を表わすことはできない。これらの情態副詞は、否定的な状態を表わすものであり、（肯定的な）動作を表わすものではないからである。

(23)a ＊あのパーフォーマーは石像のように動く。
b ＊彼は驚きのあまりさっきからじっと身動きする。
c ＊あたりはひっそりと物音がする。

実際、以下のような用例を拾うことができる。

(24)a とうとう芸者に出たのであろうかと、その裾を見てはっとしたけれども、こちらへ歩いて来るでもない、体のどこかを崩して迎えるしなを作るでもない、じっと動かぬその立ち姿から、彼は遠目にも真面目なものを受け取って、急いで行ったが、女の傍に立っても黙っていた。　川端康成『雪国』22
b そのうちに漸っと弥撒が済んだらしく、神父は信者席の方へは

振り向かずに、そのまま脇にあった小室の中へ一度引っ込んで行った。その婦人はなおもまだじっと身動きもせずにいた。が、その間に、私だけはそっと教会から抜け出した。

堀辰雄「風立ちぬ」324

c　家の前の広場の椰子の木の下にも、赤ん坊をおぶった女がしゃがんでいます。いずれもこの国の人々の癖で、やせた手足をふかく折りまげて、じっと動かずに坐っているのです。

竹山道雄『ビルマの竪琴』41

d　母が差入れてくれた弁当は、とても食べる気にはなれなかった。賢一郎は腕を組み眼を閉じて、石のように動かなかった。坐っている板張りの床はつめたくて、体温がだんだん下がって行き、頭がしびれてくるのが解るようだった。石川達三『青春の蹉跌』477

e　不安は、ないのだ。俺がこうして存在していることは、太陽や地球や、美しい鳥や、醜い鰐の存在しているのと同じほど確かなことである。世界は墓石のように動かない。

三島由紀夫『金閣寺』213

ただ、ここで注意すべきことは、「じっと」「ひっそりと」のような副詞あるいは「石のように」のような副詞句は、確かに動きがない、物音がないなどの状況を表わすものではあるが、必ずしも否定述語にのみ用いられるものではない。むしろ用例としては、たとえば「じっと」に対しては、「見つめる」「聞き入る」などのような肯定述語が用いられる方がむしろ多い、というように、否定述語を専門にとる情態副詞がある、という了解は正しくないだろう。

(25) a　「そんなものを書き止めといたって、しようがないじゃないか。」「しようがありませんわ。」「徒労だね。」「そうですわ。」と、女はこともなげに明るく答えて、しかしじっと島村を見つめていた。

川端康成『雪国』62

b　私は密かに、彼女の眠りを覚まさないように枕もとへ据わったまま、暫くじっと息を殺してその寝姿を見守りました。昔、狐が美しいお姫様に化けて男を欺したが、寝ている間に正体を顕わして、化けの皮を剥がされてしまった。――私は何か、子供の時分に聞いたことのあるそんな噺を想い出しました。

谷崎潤一郎『痴人の愛』322

c　そのとき奥から、軍服の若い陸軍士官があらわれた。彼は礼儀正しく女の一二尺前に正坐して、女に対した。しばらく二人はじっと対坐していた。

三島由紀夫『金閣寺』110

d　私が引け目を感ずると同時に、ナオミも引け目を感じたに違いありません。綺羅子が席へ交ってから、ナオミはさっきの傲慢にも似ず、冷やかすどころか俄かにしんと黙ってしまって、一座はしらけ渡りました。

谷崎潤一郎『痴人の愛』248

e　待つ時間は長かった。私は廊下の外れまで行き、硝子窓から仄暗い夜の庭を眺めた。雪は依然として降り続き、背の低い南天の木が真丸く雪を冠って並んでいた。病棟はしんと静まりかえり、看護室の他には一点の灯も見えない。私は凍った窓硝子に顔を

くっつけ、しきりに口を動かしていた。　福永武彦『草の花』83

f　「いまは山梔子がひっそり咲いています」澄江は、いきなりなにを言いだす子だろう、と息子の顔をまじまじと見た。「くちなしですか。あれは、ひっそり咲いているようでいながら、妖しい花だ。……母さん、あの花が好きですか」

立原正秋『冬の旅』1013

g　雨の道を走るような速さで歩いて会社へ出勤すると、会社はまだ夜のようにひっそり静まりかえっている場合が多かった。受付で部屋の鍵を貰って、内燃機関設計部第二課のドアーを開け、電灯のスイッチを入れると、部屋は眼を覚ます。

新田次郎『孤高の人』525

とは言うものの、これらの副詞（類）には否定述語の情態を表わす用法があることは確かである。要するにこれら第四類は以下のように記述できる。

・第四類　否定述語との対応のみ　事態否定

さて、以上をまとめると、まず述語の表わす動作（状態）と直接的な関係を持たない第一類と直接的な関係を持つそれ以外に分けられ、次に述語の表わす動作に対して何らかのスケールが適用される第二類と背後にスケールが適用されることのないその他に分けられる。最後に、背後にスケールを持たない肯定的動作に適用される第三類と、そもそもスケールを背後に持たない否定的状態に適用される第四類とに分けられる。

・第一類
- 肯定述語との対応
- 否定述語との対応
  - 要素否定（ハは任意）
  - 事態否定

・第二類（高程度）
- 肯定述語との対応
- 否定述語との対応　要素否定（ハは任意）

・第二類（低程度）
- 肯定述語との対応
- 否定述語との対応　事態否定（モが必須）

・第三類　肯定述語との対応のみ

・第四類　否定述語との対応のみ　事態否定

- 情態副詞
  - 直接的な情態でない……第一類
  - 直接的な情態
    - 背後にスケールあり……第二類（高程度・低程度）
    - 背後にスケールなし
      - 肯定的動作……第三類
      - 否定的状態……第四類

b　同窓会には卒業生がほとんど参加しなかった。（事態否定）

c　同窓会には卒業生がほとんどは参加しなかった。（事態否定）

このことは、相対数量詞は、そのものとしては直接述語動作の情態を表わすものではないので、肯定的な動作に関わる数量も、否定的な状態に関わる数量も表わすことができるためであると考えられる。

次に絶対数量詞であるが、とりあえずこれも大量数量詞と少量数量詞に分けて考察したい。大量数量詞の場合、肯定文で用いられることは勿論のこと、否定文ではハがないと不自然となり、ハを伴って要素否定を表わす。

(28) a　お菓子をたくさん食べた。

b＊お菓子をたくさん食べなかった。

c　お菓子をたくさんは食べなかった。（要素否定）

それに対して少量数量詞は、肯定文では勿論用いられるが、否定文ではハがあってもなくても不自然となる。ただ、モを伴って皆無であることを表わすことはできる。

(29) a　お菓子を少し食べた。

b＊お菓子を少し（は）食べなかった。

c　お菓子を少しも食べなかった。（皆無）

このような振舞いは、まさに第二類に相当する。ここで気にかかることは、相対数量詞が第一類となり、絶対数量詞が第二類となるのはどうしてか、ということである。言い換えれば、第一類は当該動作（状態）の直接の情態を表わすものではないので肯定にも否定にも対応し

4　数量詞と否定

このような中に数量詞はどのように位置付けられるだろうか。まず相対数量詞から確認していきたい。相対数量詞も、全称数量詞と非全称数量詞に分けて見ていくことにする。全称数量詞は肯定文にも否定文にも用いることができ、否定文の場合ハがなければ事態否定、ハがあれば要素否定というように、ほぼ第一類と同じように振舞う。ただ、第一類は否定文でハが用いられない場合、事態否定・要素否定と両義的であったが、数量詞の場合には事態否定に偏るという違いはある。

(26) a　クラス会には卒業生が全員参加した。

b　クラス会には卒業生が全員参加しなかった。（事態否定）

c　クラス会には卒業生が全員は参加しなかった。（要素否定）

それに対して、非全称数量詞は、肯定文にも否定文にも用いられることは全称数量詞と同じであるが、否定文の場合、ハの有無に拘わらず事態否定となる。これは非全称数量詞を否定文で用いた場合には、要素否定の解釈が阻害されるためであると考えたい。すなわち、「ほとんど」ではないとすると、「すべて」なのか、もっと少ない、あるいはゼロなのか、決定できない。そのために要素否定の解釈はできないのではないか。そうすると、非全称数量詞の場合も第一類の亜種であると考えることができる。

(27) a　同窓会には卒業生がほとんど参加した。

うるのに対して、第二類以下は当該動作（状態）の直接の情態を表わすために肯定（否定的状態のみ否定）に限られるということであった。では、相対数量詞は直接の情態ではなく、絶対数量詞は直接の情態であるということになるが、それはどのようなことなのだろうか。確かに、直接の情態であるかないかと言うと、いかにも理不尽な主張をしているかのように見えるが、要は肯定・否定両方の情態を表わしうるのか、肯定・否定いずれかの情態のみしか表わせないのかという違いであった。そのような目で見れば、相対数量詞は全体量が決まっている中での割合を表わすものであったので、同一の事態であっても、肯定側から見た見方（それに該当するものの割合）と否定側から見た見方（それに該当しないものの割合）という双方の見方が可能であった。それに対して、絶対数量詞は述語によって示された事態に該当するものの分量の絶対的な評価を表わすものであり、述語によって示された事態に該当しないものの分量の計測など原理的に不可能である。以上のように、原則として、相対数量詞が第一類に、絶対数量詞が第二類に属することには問題はないように思われる。さらにスケールに関して付け加えておけば、数量詞は原理的にスケールを背後に持った表現であり、絶対数量詞が第二類に属すのは当然のことと言えるが、相対数量詞が第一類に属すことに関しては、第一類はスケールに関する規定は含んでおらず、背後にスケールを認識させないものがある（「窓をわざと閉めない」の類）一方で、認識させるものもあっても構わないと思われる。

さらに基数数量詞についても検討したい。基数数量詞の場合、井島（一九九五・一〇）で検討したように、肯定文でも否定文でも、ハ・モいずれもないもの、ハが付加するもの、モが付加するもののいずれもが可能であった。ただ、その表わす内容はそれぞれに違いがあり、期待との対比（思ったより多い・少ない）という違いも含まれるが、その点は捨象してこれまでの議論の中にあてはめると、肯定文にも否定文にも用いることができ、肯定文の場合、ハ・モなしあるいはモの場合には丁度の数量、ハの場合にはそれ以上を表わすが、否定文の場合、ハ・モなしでは事態否定を、ハではそれ以上を、モでは事態否定ないしそれ以上を表わす。とすると、あえて先ほどの類型に合わせれば、第一類ということになりそうである。

(30) a　同窓会には卒業生が五十人は出席した。（丁度）
b　同窓会には卒業生が五十人は出席した。（以上）
c　同窓会には卒業生が五十人も出席した。（丁度）
d　同窓会には卒業生が五十人出席しなかった。（丁度・欠席者）
e　同窓会には卒業生が五十人は出席しなかった。（以上）
f　同窓会には卒業生が五十人も出席しなかった。（以上／丁度・欠席者）

基数数量詞も、肯定文における動作に関わる数量も、否定文における否定的状態に関わる数量も表わすことができ、さらに否定文においては、ハを伴わない場合には事態否定すなわち否定的事態に関わる数量を表わし、ハを伴う場合には当該数量以下であること、すなわちいわば要素否定の一種であることを表わす。ということで、基数数量詞

も第一類の亜種であると了解される。

5　程度副詞と否定

いわゆる程度副詞は、肯定文でしか用いることができず、またハを付加することもできない。すなわち、程度副詞は肯定専用であるように見える。

(31) a　今日はとても暑い。
　b ＊今日はとてもは暑い。
　c ＊今日はとても暑くない。
　d ＊今日はとてもは暑くない。

しかるに、高程度の程度副詞の要素否定にあたる用法は理論的には可能なはずで、ワケデハナイなどを用いたいわゆるメタ言語的否定表現を作ることができる。

(32) a　今日はとても暑いわけではない。
　b　今日はとても暑くはない。

このような要素否定の表現には、現代語では「あまり・それほど・たいして・さして」のような専用の形式が見られる。これらは従来は、否定と呼応するために陳述副詞に入れられていたものである。ただ、こちらにもハを用いることはできない。

(33) a　今日はあまり暑くない。
　b ＊今日はあまりは暑くない。

程度副詞は、〝程度〟を表わす以上、背後にスケールを持っていると認識されるのは明らかであるにも拘わらず、現代語ではこのように、肯定専用の程度副詞と否定専用の程度副詞とに分けられ、あたかもそれぞれ第三類、第四類に属すかのように振舞う。

しかしながら、古典語では同一の程度副詞が肯定文にも否定文にも用いられ、背後にスケールを持つ第二類という、妥当なカテゴリーにおさまる。

(34) a　天地の神もはなはだ（甚）わが思ふ心も知らずや
　　『万葉集』巻十三・三二五〇
　b　いとやむごとなき際にはあらぬが、すぐれて時めきたまふありけり。
　　『源氏物語』桐壺

なぜ現代語の程度副詞にはこのような使い分けがあるのだろうか。一つの説明の仕方としては、係り受けの観点から、現代語の程度副詞は文末まで（否定も含めて）係るために、「とても」のような肯定専用の程度副詞が肯定述語に、「あまり」のような否定専用の程度副詞が否定も含めた述語に係るのは問題ないが、肯定専用の程度副詞が一旦（肯定の）述語に係り、それ全体がさらに否定助動詞に係るという構造は許されないからである、というものも見出される。

(35) a　今日はとても暑い。
　b ＊今日はとても暑くない。

c　今日はあまり暑くない。

しかしながら、この説明の仕方はあくまで係り受けという統辞構造論に乗ったものであり、さらにどうして現代語では程度副詞は文末まで〝係る〟のかの説明はなされていない。

また肯定専用の程度副詞は、「大変・非常に・とても・かなり・随分・結構」など数が多い上に意味の分化が進んでいるのに対して、否定専用の程度副詞は「あまり・それほど・たいして・さして」などに限られる上にそれほど意味の分化は見られないようである。

以上のように、理論的にも、程度副詞は明らかに背後にスケールが存在するのであるから、第二類に属すのが自然であり、実際の用法においても、肯定専用の程度副詞と否定専用の程度副詞には数的にも用法においても明らかな偏りがあり、またワケデハナイなどを用いることによって肯定専用の程度副詞を用いて要素否定を表わすことも可能である。

これらのことを考えると、現代語のように、程度副詞が肯定専用のものと否定専用のものに分化している状況の方が特殊で、古典語のように、同じ程度副詞が肯定文中にも否定文中にも用いられる状況の方が自然であると判断せざるをえない。それならばなぜ、現代語のような程度副詞が分化した状況が生じたか、ということが問題となるが、それには肯定専用の程度副詞の側からは説明できそうにない。むしろ否定専用の程度副詞が、歴史的に、否定述語に対応する程度副詞の位置を占有するようになって、肯定専用の程度副詞が用法を縮小したのではないかと推測されるが、その論証は改めて試みたい。

6　副助詞句と否定

副助詞は、井島（一九九二・三、二〇〇七・三、〇八・三）でも検討を加えたように、おおきく対比限定系、並列添加系、程度例示系の三類に分けることができると思われる。これらの副助詞を用いた副助詞句と否定との関わりのありかたは、副助詞によってさまざまである。

そのうち、否定との関わりで興味深いのは並列添加系のマデである。㊱bは、いつもまず最初に娘にお土産を買う父が、他の人に対しては勿論、娘にもお土産を買わなかった、という意味で、誰にも買わなかったという点で事態否定にあたる。㊱cは、いつも娘へのお土産は後回しにする父が、他の人へのお土産は買ったが、娘へのお土産は買わなかった、という意味で、他の人には買ったという点で要素否定にあたる。ここで、ワケデハナイを用いると、㊱dのように要素否定の用法となる（㊱bと㊱cでハを用いない場合は同じ文となるが、この場合、事態否定と要素否定の二つの解釈が可能であるということである。それに対して、㊱cでハを用いた場合は要素否定の解釈に誘導される）。

㊱a　娘へのお土産まで買った。

b　娘へのお土産まで買わなかった。　〈事態否定〉

c　娘へのお土産まで（は）買わなかった。〈要素否定〉

d　娘へのお土産まで買ったわけではない。〈要素否定〉

同じことをサエ句に適用すると、(37)bの、誰に対するお土産も買わなかったという、事態否定の用法のみが可能であり、要素否定の意味にはならない。また、そもそもサエ-ハというつながりも不可であり、サエ…ワケデハナイという文も成立しない。

(37)a　娘へのお土産さえ買った。

b　娘へのお土産さえ買わなかった。　〈事態否定〉

c＊娘へのお土産さえ（は）買わなかった。

d＊娘へのお土産さえ買ったわけではない。

マデとサエとによってどうしてそのような相違が生ずるのかに関しては、井島（二〇〇七・三）で論じており、ここではその詳細は省く。また、モはマデに振舞いが近く、デモ・ダッテはサエに振舞いが近い。

それに対して、対比限定系のダケを見てみると、(38)bはハの有無に関わらず、他の人へのお土産は買ったが、娘へのお土産は買わなかった、という意味で、事態否定にあたる。ワケデハナイを用いた(38)cは、娘へのお土産を買ったが、他の人へのお土産も買ったという意味で、要素否定にあたる。ここで、(38)bが事態否定で、(38)cが要素否定にあたることに関しては、別稿に譲る。

(38)a　娘へのお土産だけ買った。

b　娘へのお土産だけ（は）買わなかった。〈事態否定〉

c　娘へのお土産だけ買ったわけではない。〈要素否定〉

またバカリも、ダケと基本的には振舞いは近いが、(38)bの事態否定については、買わなかったお土産がどれもこれも娘のものだ、という意味が不自然になるために、成立しない。ただし、ダケと同じく対象が唯一という解釈をすれば（「そればかりはご勘弁を」などのような用法）、用いられないわけではない。

(39)a　娘へのお土産ばかり買った。

b#娘へのお土産ばかり（は）買わなかった。

c　娘へのお土産ばかり買ったわけではない。〈要素否定〉

シカ…ナイについても、その振舞いはダケに準じるが、(40)bの事態否定に関しては、恐らくナイを直接二つ重ねることが統語的に許されないために不可となる。ただし、(40)cのようにワケデハナイを用いて間接的に重ねることは可能であるが、この場合は要素否定となる。

(40)a　娘へのお土産しか買わなかった。

b＊娘へのお土産しか（は）買わなくなかった。

c　娘へのお土産しか買わなかったわけではない。〈要素否定〉

程度例示系に目を転ずれば、程度を表わすホドは、(41)aのように肯定文では落ち着きが悪いようにも見えるが、恐らくこれはホド句に用いられた「山田の家」が、知らない人には基準としてイメージできないことによると思われる。(41)'aのようにある程度イメージできるものであれば、許容度は上がる。それに対して、否定文になると、相対的な程度差を表わすことになるのか、(41)b・cのように自然な文となり、かえって「山田の家は広い」という含意も持つことになりそうである。また、否定文はいずれの場合も要素否定となり、事態否定とはな

らないが、これは程度副詞の振舞いに準じているのであろう（といっても、古典語の程度副詞の振舞いに近いのであって、現代語のように肯定専用の程度副詞、否定専用の程度副詞と分かれているのはやはりイレギュラーな状況なのだろう）。

(41) a ?.我が家は山田の家ほど広い。

a' 山田の家はちょっとした公園ほど広い。

b 我が家は山田の家ほど（は）広くない。〈要素否定〉

c 我が家は山田の家ほど広いわけではない。〈要素否定〉

同じく程度を表わすクライは、直接否定を受ける(41)bの場合に不自然となるほかは、ホドと同じように振舞う。

例示を表わすナド・ナンカ・ナンテなどは、副助詞とは言うものの、述語と結び付く格成分として働くというよりは、それを構成する名詞の次元で働く場合が多く、ここで論じているような否定との関わりは持たないように思われる。ただ、〈軽視・謙遜〉用法ないしその反対の〈高評価〉用法は、どちらかと言えば否定述語が用いられることが多いかもしれない。これは当該対象の評価が低すぎて、あるいは高すぎて、当該行為に不向きであることを表わすためであろう。

(42) a 山田は飲み会に行ってもチューハイなど飲まない。〈軽視〉

b 花子は友達の結婚式にもドレスなど着たことがない。〈高評価〉

以上のように、副助詞句と否定との関わりはかなり錯綜しているが、対比限定系および並列添加系の場合は、およそ第一類にあたるが、さまざまな条件によってさらに用法が限られる場合がある。また、程度例示系の場合は、そのうち程度を表わすものは、本来の程度副詞のあり方と並行的に第二類にあたり、例示を表わすものは特に位置付けを持たない、ということになるのではないだろうか。

7 時間副詞と否定

時間副詞をなぜ独立して取り上げるかというと、時間副詞の振舞いが特殊であるからである。何らかの出来事の成立において、時間はその出来事の内にあるのか、あるいは出来事の外にあって、むしろその時間の流れの中でその出来事が生じるのか、明確に分けがたい。ここで、時間・空間は対等で、空間も出来事の内か外か不明確であるのではないか、と思われるかもしれない。理論的にはそうかもしれないが、恐らく空間は知覚可能なために、どちらかと言えば出来事の内に含まれていると了解されるのではないだろうか。

そのような事情が文の構造にも反映して、時間副詞は命題の内か外か、微妙な位置付けとなることになる。そのことはさらに、時間副詞と否定との関係にも影響を及ぼすことになる。すなわち、そもそも当該命題の不成立を表わす事態否定と、命題内の要素を打ち消す要素否定との区別が不明確になってしまう。

ここで、時間副詞といってもいろいろな類型がある。本稿では、一次元的な時間の流れの一点（ある程度幅があっても、一点と認識される）を表わす「時点」、ある事態が持続している時間の範囲を

表わす「期間」、ある事態がその中のどこかで成立する時間の範囲を表わす「期限」に分けて検討したい（時間副詞に関しては、井島（一九八九・三、九〇・三）に詳しい）。

・時点：（三時、五日、九月）ニ、（明日、翌日、来年）φ
・期間：～カラ、～マデ、～中、～間、～間中、～（以）前、～（以）後
・期限：～カラ、～マデニ、～中ニ、～間ニ、～間中ニ、～（以）前ニ、～（以）後ニ

まず、時点に関して、事態否定と要素否定とを区別しようとすると、(43)bのように「三時」と言わず、そもそもその日、雨が降らなかった場合が事態否定で、(43)cのようにその日雨は降ったが、それが「三時」でなく「四時」であった場合が要素否定である、と言おうと思えば言うことはできる。しかしこうなると、これまで見てきた他の副詞句において、事態否定と要素否定とは決定的に異なっていたのに比して、「三時」以外に雨が降ったかどうかによってどちらかになるというように、些末な区別と言わざるを得なくなる。

(43) a　天気予報通り、三時に（は）雨が降った。
　b　天気予報通り、三時に（は）雨は降らなかった。結局その日は雨が降らなかった。〈事態否定〉
　c　天気予報通り、三時に（は）雨は降らなかった。四時になって降った。〈要素否定〉

次に、期間の場合を検討したい。肯定述語が用いられれば、(44)aのように、その期間、当該事態がずっと持続していることを表わしている。否定述語が用いられれば、それと対照的に、その期間、当該事態がまったく成立しなかったことを表わすことになる。その点は、時点の場合とある程度並行している。

(44) a　太郎は夏休みの間中、アルバイトをした。
　b　太郎は夏休みの間中（は）、アルバイトをしなかった。

ただし、時点の場合と異なるのは、(45)aのように、事態否定は成立しないものの、要素否定として、(45)b・c・dのような表現が可能である点である。すなわち、期間が否定される場合には、期間副詞の二重性が問題になる。一つは、当該期間は前後の他の期間との対比の上に成り立っているという側面であり、一つは、当該期間が一種の全称数量詞としてその中の部分期間との対比の上に成り立っているという側面である。ここでは、前者を「外」の側面、後者を「内」の側面と呼ぶことにする。そうすると、要素否定として当該期間が否定された場合、(45)b・cのように、当該期間の前後の他の期間が肯定される場合と、(45)dのように、当該期間の中の一部の期間が肯定される場合とが可能である。

(45) a ??太郎は夏休みの間中（は）、アルバイトをしなかった。そもそもアルバイトをしたことがなかった。
　b　太郎は夏休みの間中（は）、アルバイトをしなかった。夏休みに入る前はずいぶんアルバイトをした。
　c　太郎は夏休みの間中（は）、アルバイトをしなかった。夏休みが終わってから頑張ってアルバイトをした。

d　太郎は夏休みの間中（は）、アルバイトをしなかった。夏休みにアルバイトをしたのは二週間だけだ。

ただし、どの表現を用いても「外」の側面の否定は可能であるが、「内」の側面の否定を表わすためには、「～中」、辛うじて「～カラ」「～マデ」という形を用いるか、全期間であることを明示するズット（ハ）のような副詞の助けを借りなければならない。

(46) a ＊太郎は夏休みの間（は）、アルバイトをしなかった。夏休みにアルバイトをしたのは二週間だけだ。

b　太郎は夏休みの間、ずっと（は）アルバイトをしなかった。夏休みにアルバイトをしたのは二週間だけだ。

さらに、期限の場合を見てみたい。肯定述語が用いられれば、(47) aのように、その時間の範囲のどこかで当該事態が成立したことを表わしている。否定述語が用いられれば、当該事態がまったく成立していなかったことを表わす点では、期間の場合と共通する。

(47) a　太郎は夏休みの間に、ヨーロッパ旅行をした。

b　太郎は夏休みの間に（は）、ヨーロッパ旅行をしなかった。

期限の場合も期間と同様に、(48) aのように、事態否定は成立しないものの、要素否定として、(48) b・cのような表現が可能である。ただし、期限の場合は、期間の場合とは異なって、要素否定も「外」の側面の否定しか存在せず、「内」の側面の否定は原理的にも考えることができない。ちなみに、カトウ（一九八五）では、期間には全称数量詞の意味が含まれ、期限には存在数量詞の意味が含まれると論じているが、期間にはある程度そのような側面はあると言えるだろうが、期限には数量詞的解釈は当てはまらない。

(48) a ??太郎は夏休みの間に（は）、ヨーロッパ旅行をしなかった。そもそもヨーロッパに行ったことはない。

b　太郎は夏休みの間に（は）、ヨーロッパ旅行をしなかった。夏休みに入る前に行った。

c　太郎は夏休みの間に（は）、ヨーロッパ旅行をしなかった。夏休みが終わってから行った。

時間に関わる副詞を網羅しようとすれば、「やっと」「ようやく」「まだ」のようなアスペクトに関わる副詞などの他、「ちょうど」「まさに」「かつて」「すでに」「まもなく」さまざまなものがあるが、割愛したい。

8　それ以外の副詞句と否定および小括

それ以外にもさまざまな副詞句が見出されるが、そのいくつかについて若干検討したい。

まずは青木（一九八八・八）でも取り上げられたヨウニを用いて〈比況〉を表わす副詞句であるが、これは事態否定・要素否定のいずれにも用いることができるが、ハが加わると要素否定の解釈に限られる。

(49) a　妹はお姉ちゃんのように泣かない。　〈事態否定〉

b　妹はお姉ちゃんのように（は）泣かない。〈要素否定〉

とは言うものの、たとえられる対象が、言語外の知識として肯定述

語ないし否定述語のどちらかにしか結び付かない場合には、要素否定・事態否定のいずれかにしかならない。

(50) a　石のようにてこでも動かない。　〈事態否定〉

b　最近は鯨のように（は）酒を飲まない。〈要素否定〉

ここには、情態副詞を第一類から第四類までに分類したことと同じ論理が働いている。

他にもさまざまな副詞句が見出されるだろうが、否定との関係において興味深いものはおよそ見渡せたのではないだろうか。これまで論じてきた数量詞や副助詞句、あるいは程度副詞は以下のように情態副詞の四類型におさまることになりそうである。

・第一類…相対数量詞・基数数量詞・副助詞句（対比限定系・並列添加系）・時間副詞

・第二類…絶対数量詞・程度副詞（本来）・副助詞句（程度系）

・第三類…肯定程度副詞

・第四類…否定程度副詞

9　陳述副詞と否定

9・1　否定と呼応する陳述副詞（否定極性表現 negative polarity items）

ここで、(51) a のように不定語＋モが主節に現われ、主節の述語（「思わなかった」）と主述関係にある場合は、「誰も」という否定極性表現もそのまま主節の否定と呼応しているので、文としても自然であるし、統語的にも問題はない。しかるに、(51) b のように不定語＋モが補文に現われ、否定辞は主節述語（「思わなかった」）にしか用いられていない場合は、否定の呼応が節を跨ぐことになる。ただし、この場合文はそれほど自然ではない（とはいっても完全に非文でもない）ので、このような文を検討する必要はないと断じられるかもしれない。しかるに、(51) b' のように不定語＋モに用いられたモを補文標識トの後に移動すればそれほど不自然ではなくなるのではないだろうか。ましてや、(51) c・c'、(51) d・d' のように、主格位置以外に現われる不定語＋モあるいはト＋モの場合には、およそ自然な文であると判定されるのではないだろうか。

(51) a　誰もそこに人がいるとは思わなかった。

b ?そこに誰もいるとは思わなかった。

b'　そこに誰がいるとも思わなかった。

c　何も食べようとは思わなかった。

c'　何を食べようとも思わなかった。

d　どこにも行こうとは思わなかった。

d'　どこに行こうとも思わなかった。

このことは、「誰も」「何も」「どこにも」のように、なかば一語化して陳述副詞に準ずる働きを持つものは、一方では格要素として補文中で働く一方、否定辞が主節にある場合には、モを伴って否定と呼応

する陳述副詞として主文でも働くという二重性を持つからであろうと思われる。ト＋モは、不定語＋モが要素の〈並列〉であるのに対して、いわば事態の〈並列〉に変換したものであると思われる。すなわち、〈並列〉を表わすモは、複数の要素を並べることができ、「誰も彼も」「何もかも」「どこもかしこも」のように、可能である限りどんな要素をそこに代入してもそのことが成り立つ、ということから全部否定を表わすことになったと考えられることは容易に見当が付く。ト＋モの場合も、「誰がいるとも、彼がいるとも」などのように敷衍することができ、同様の論理を適用することができる。

同様に数量詞、一＋助数詞＋モが補文中に用いられ、否定辞は主節にしかない場合でも、充分に自然な文も少なくない。

(52) a　お菓子をひとつも食べようとは思わなかった。

b　一人も手を挙げようとは思わなかった。

これも、井島（一九九五・一〇）で議論したように、最小単位である1が満たされないことから、数量は0、すなわち当該事態そのものが成立しない、ということから全部否定を表わすと了解される。

このように、成立からすると、不定語＋モは、代入可能な要素の集合が確定されている場合に用いられ、一＋助数詞＋モは、具体的な要素は問題ではなく、それを数量的にみる場合に用いられるのではないかと予想されるかもしれない。すなわち、(53)aの場合は個々の学生を念頭に浮かべることができる場合に用いられ、(53)bの場合は学生を個々人の個性は失われ単に数量として扱われる場合に用いられるのではないかと予想される。あるいはそのようなニュアンスが感じられると言ってもよいかもしれないが、文法化が進んだ結果、日常的にはそれほど明確な区別はないと言うべきだろう。

(53) a　そこには学生は誰もいなかった。

b　そこには学生は一人もいなかった。

特定の人物が念頭に浮かぶ場合（(54)a・b）、人数のみが問題である場合（(54)c・d）では、あるいは以下のように自然さに違いが見られるかもしれないが、絶対的なものではない。

(54) a　A先生の定年退職の会が挙行されたが、そこには現在のゼミの学生は［誰も／？一人も］いなかった。

b　B氏が突然倒れて病院に担ぎ込まれたが、家族は［誰も／？一人も］駆けつけて来なかった。

c　C劇団の旗揚げ興業が行われたが、観客は［？誰も／一人も］いなかった。

d　D大学の教員が公募されたが、［？誰も／一人も］応募者がなかった。

ここに示された不定語や数量詞は、補文内の命題要素である一方で、主文の否定辞に対する否定極性表現となっている。

ここで、(55)aのような程度副詞「少し」＋モで構成される否定極性表現は、程度副詞としては補文内で働くが、全体としての否定極性表現は主文で働くと考えられる。また(55)bのようなあまり使われるわけではない程度副詞「ちっと」＋モは、補文内で働くことが少なくなり、

否定極性表現として主文で働く傾向が強くなると思われる。さらに(55)cのような数量詞「ひとつ」＋モは、すでに数量詞として補文内で働くことはなく、専ら否定極性表現として主文で働くようになっていると思われ、結局(55)dの「全然」のような、純粋な否定極性表現に連続しているのであろう。

(55) a　今日のパーティは少しも面白いとは思わなかった。
　b　今日のパーティはちっとも面白いとは思わなかった。
　c　今日のパーティはひとつも面白いとは思わなかった。
　d　今日のパーティは全然面白いとは思わなかった。

ただ、このことを階層的モダリティ論に直結して、補文は命題に、主文はモダリティに相当すると考えて、程度副詞が陳述副詞に変化する、すなわち文法化するに従って、命題内からモダリティへと階層が移動する、というように考えるのは間違っているだろう。そう考える背後には、否定はモダリティレベルにあるということが前提とされていることになるが、否定の階層上の位置は、命題―モダリティというスケール上ではその中間にあると議論されることはあったが、モダリティレベルにあるとは考えられないからである。

9・2　その他の陳述副詞と否定

山田（一九〇八・九）の陳述副詞は、いわゆる呼応現象をもとに設定された類型であるが、ここではその後の議論にしたがって、注釈副詞・叙法副詞などという形で拡張されたものを念頭に置いている。

さて、狭義の陳述副詞は、文の肯定否定に関わりなく用いることができ、また原則としてハは付加できない。陳述副詞においては、それが文の主題であると言うこともできず、何かと対比しているとも考えられないからだろう。

(56) a　明日はたぶん雨が降るだろう。
　b＊明日はたぶんは雨が降るだろう。
　c　明日はたぶん雨が降らないだろう。
　d＊明日はたぶんは雨が降らないだろう。

その点は、話し手が文全体に対して注釈を加える注釈副詞に関しても事情は同じである。

(57) a　明日は幸い雨が降るだろう。
　b＊明日は幸いは雨が降るだろう。
　c　明日は幸い雨が降らないだろう。
　d＊明日は幸いは雨が降らないだろう。

ここに至ると、もはや事態否定や要素否定といった否定の区別はまったく適用できない。事態否定や要素否定といった概念が適用できるためには、当該の副詞が命題の中になければならないが、陳述副詞は命題の外にあると考えられるために、これらの概念は適用できないのだろう。

ここで、陳述副詞の述語化ということを考えてみたい。純粋な陳述副詞は、(58)bのように述語化することはできない。

(58) a　明日はたぶん雨が降るだろう。
　b ＊明日雨が降る（だろう）ことはたぶんだ。

しかるに注釈副詞は、(59)bのように、命題を名詞化して、それを主語とする述語として用いることができる。

(59) a　残念ながら、出身高校が準決勝で敗れた。
　b　出身高校が準決勝で敗れたのは、残念だった。

このことは、陳述副詞全体が、と言うことはできないかもしれないが、少なくとも注釈副詞は、命題全体に対して何らかの〝注釈〟を加えるものである、ということを意味しているのだろう。そして否定はその命題中に含まれているために、注釈（陳述）副詞に関しては事態否定や要素否定といった区別が存在しないと考えられる。またさらに注釈副詞が述語化できるということは、これらがいわゆるモダリティレベルにあるということに疑いを抱かせることにもなる。

おわりに

本稿では、できるだけ網羅的に、副詞句の類型ごとに否定との関係を、特に事態否定・要素否定という否定の区別の観点から通観した。その結果、確かに命題の内外という違いは存在するものの、従来しばしば見られたような、命題内においても副詞句を階層化しようとする試みは、議論の方向が誤っていたのではないかと思われる。副詞句と述語との意味的な関係をさらに深く考察することによって、命題内の副詞句と否定との関わりには以下の四つの類型が見出されるのではないかと考えられた。

・第一類
　肯定述語との対応
　否定述語との対応
　　要素否定（ハは任意）
　　事態否定
・第二類（高程度）
　肯定述語との対応
　否定述語との対応　要素否定（ハは任意）
・第二類（低程度）
　肯定述語との対応
　否定述語との対応　事態否定（モが必須）
・第三類　肯定述語との対応のみ
・第四類　否定述語との対応のみ　事態否定

さらに命題の外で働く副詞句（広義の陳述副詞）には、もはや事態否定・要素否定という否定の区別も当てはめることはできないことも確認した。

資料

芥川龍之介「俊寛」・有島武郎「小さき者へ」・石川淳「処女懐胎」「かよい小町」・石川達三『青春の蹉跌』・井上靖『あすなろ物語』・川端康成『雪国』・竹山道夫『ビルマの竪琴』・立原正秋『冬の旅』・谷崎潤一郎『痴人の愛』・壺井栄『二十四の瞳』・夏目漱石『こころ』・

新田次郎『孤高の人』・林芙美子『放浪記』・福永武彦『草の花』・堀辰雄「風立ちぬ」・三島由紀夫『金閣寺』・村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』・山本有三『路傍の石』：CD-ROM版『新潮文庫の一〇〇冊』（数字はCD-ROM版のページ）

参考文献

山田　孝雄（一九〇八・九）『日本文法論』宝文館

南　不二男（一九七四・三）『現代日本語の構造』大修館書店

本多　勝一（一九七六・一）「連載・日本語の作文技術８」『月刊言語』第五巻第一号 pp95～102

北原　保雄（一九八一・一一）『日本語助動詞の研究』大修館書店

原田　登美（一九八二・三）「否定との関係による副詞の四分類―情態副詞・程度副詞の種々相―」『国語学』第百二十八集 pp138～122

Kato, Yasuhiko（一九八五・＊）"Negative Sentences in Japanese", "Sophia Linguistica" 第十九号Monograph

青木　伶子（一九八八・八）「車は急に止まれない―『は』助詞の働き―」『国語国文』第五十七巻第八号 pp1～17

井島　正博（一九八九・三）「物語と時制―近現代小説を材料として―」『東洋大学日本語研究』第二輯 pp48～71

井島　正博（一九九〇・三）「アスペクトの表現機構」『東洋大学日本語研究』第三輯 pp13～57

井島　正博（一九九二・三）「限定表現の多層的分析」『中央大学文学部紀要』第六十九　号 pp107～125

井島　正博（一九九五・一〇）「数量詞とハ・モ」『築島裕先生古稀記念　国語学論集』汲古書院 pp1041～1062

井島　正博（二〇〇七・三）「サエ・マデ・デモ・ダッテの機能と構造」『日本語学論集』第三号 pp45～82（東京大学）

井島　正博（二〇〇八・三）「クライ・ホド・ナド・ナンカ・ナンテの機能と構造」『日本語学論集』第四号 pp42～97（東京大学）

井島　正博（二〇一三・三）「数量詞と否定文」『成蹊人文研究』第二十一号 pp1～27

文学部　非常勤講師　二〇一三年三月二十五日

推薦者　文学部　久保田篤教授

PRINTED BY
SEIKO-SHA CO. LTD.
1-5-15, NISHITSUTSUJIGAOKA, CHOFU-SHI, TOKYO

Seikei University
3-3-1, Kichijoji-Kitamachi, Musashino-shi,
Tokyo, 180-8633 Japan